

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.16

編集	1987・10・25
発行	佐賀県立九州陶磁文化館
代表者	久間 三郎
	〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平乙3100-1
	電話 0955-43-3681
印刷所	山口印刷株式会社
	佐賀県伊万里市二里町甲2476-21



そめつけ さき ず だい ばち
染付 鷺 図 台 鉢

館蔵資料

佐賀・有田皿山

江戸前期 (17世紀後半)

口径33.2cm 高さ20.3cm 高台径21.5cm

高い高台が特徴的な台鉢。見込みには雪をもった柳の樹を描き、幹に二羽の鷺がとまる。雪と鷺の部分は染付で輪郭をとり、中を白化粧土で埋めている。口縁部内外に雷文の帯を二条めぐらせている。高台には唐草文を描き、三方に八つ目足文の透しが入る。17世紀後半の有田皿山の製品。近年、ヨーロッパから買い戻された資料である。

昭和62年度特別企画展

伊万里・古九谷名品展

11月1日(日)～12月6日(日)

「伊万里・古九谷名品展」は当館と石川県立美術館の共同企画で開かれる。古九谷の産地の議論が盛んに行われるなかで、本展は現在考えられるもっとも確実な資料を一堂に集めて、日本の色絵磁器を代表する伊万里と古九谷の本質とそれぞれの磁器の美しさを理解してもらうのがねらいである。

日本の色絵磁器は、江戸時代17世紀の中頃に九州有田の地に始まり、その技術は間もなく北陸九谷の地に導入されて「古九谷」が生まれたといわれる。

日本で最初の磁器である肥前磁器（積み出し港の名から伊万里焼と呼ばれた）は、17世紀初頭に佐賀県の有田周辺で焼成が始まった。有田周辺で始まった最大の理由は磁器焼成に不可欠な原料の陶石場が泉山（有田町）、龍門（西有田町）、三股（長崎県波佐見町）などで発見されたからであろう。これらの陶石は比較的良質の白磁原料であり、埋蔵量も豊富であったために有田皿山が急成長を遂げ、また江戸時代を通じて国内磁器生産の中心としての立場を維持したのであった。

肥前磁器の急成長のもう一つの要因は、中国の磁器輸出が明末・清初の間によって1640年代ごろを境に止まったことである。そのため国内市場はたちまち肥前磁器が席捲し、1650年代以降は海外輸出も盛んとなり、中国が鎖国状態にあった1680年代までは肥前窯業界は活況を呈していたとみられる。

この中国からの磁器輸出の杜絶は、単に肥前磁器の需要を急増させたというだけでなく、動乱で疲弊した中国の窯業地から陶工が肥前に渡来した可能性を強くする。というのは、1640年から50年代は肥前磁器の技術が大きく変わり、中国製品に比肩するものができるようになった時期であり、色絵の技術をはじめ、成形、装飾、焼成の各面で中国技術者の参加を想像させてくれるのである。

このような技術革新の時期に操業していたと推測される有田あたりの窯跡から、古九谷タイプの色絵素地が出土している。これらは有田の初期色絵を知る上で重要であるとともに、古九谷の年代を考える上でも貴重である。

九谷の窯跡は石川県江沼郡山中町九谷にあり、1号窯、2号窯の2基の窯が確認されている。発掘調査によって1号窯が古く、その後2号窯が築かれたとされ、1号窯は「明暦式歳九谷八月六」銘の色見陶片などより明暦元年（1655）ごろには開窯していたとみられる。

九谷古窯2基から出土した製品や窯道具を肥前古窯のそれと比較してみると、肥前の1650年代から60年代のものに似通っている。物原からは、白磁・青磁・鉄釉・灰釉・瑠璃釉・染付などが出土し、器種は鉢・皿・碗が多い。製品に白磁が多いことは色絵焼造をめざした窯であることを物語る。これらの白磁皿・鉢に色絵を施した製品がどのようなものであったかは今後の重要な研究課題である。

肥前の色絵磁器は正保4年（1647）ごろに始まったとされるが、初期の色絵がどのようなものであったかはよくわからず、伝世品で示すことは難しい。しかし近年の消費地遺跡の発掘で出土したいくつかの例や、窯跡出土の色絵素地などからみると、明末の中国磁器に近い意匠のものが主流をなしたように思われる。そして万治元年（1658）ごろには金銀焼付法が始まり、海外からの注文に応じて輸出時代を迎える。この1660年代以降の輸向色絵についてはヨーロッパに伝存した資料からよく知られている。輸出初期には染付同様に中国磁器の意匠に倣ったものが多い。色絵芙蓉手皿などはその典型例である。色の用い方としては初期色絵同様のものに加えて、赤を基調にしたものと、逆に赤を少なくし青、緑や黄を多用したものなどがある。いっぽう国内向けの色絵については十分把握・整理されているとは言い難い。この1650年代から80年代にかけては国内外の需要に応じて色絵にもいくつかの様式が生み出された。こうした急成長の時期を経て、いわゆる鍋島藩窯様式・柿右衛門様式と、染錦手の古伊万里様式といった色絵の様式化が明確になるのは元禄（1688～1703）前後のことである。

本展は、伊万里と古九谷の名品132点に加え、両古窯からの出土品約350点、東京大学構内旧大聖寺藩江戸上屋敷跡出土品74点、それに古文書を展示する。

（大橋康二）



染付草花文大皿 伊万里
佐賀県立九州陶磁文化館



重文 色絵蝶牡丹亀甲繫文平鉢 古九谷
梅澤記念館



染付人物文山水図鉢 伊万里
佐賀県立九州陶磁文化館



青手樹木図平鉢 古九谷
石川県立美術館



染付牡丹文大皿 伊万里
今右衛門古陶磁参考館



青手芭蕉図平鉢 古九谷
寺井町九谷焼資料館

韓国訪問記

吉 永 陽 三

昭和62年9月9日から9月12日まで「韓国窯業視察団」調査員として大韓民国へ出張した。訪問先は①成均館（ソウル市）、②国立中央博物館（同）、③民俗村（京畿道龍仁郡）、④石峯陶芸（趙慇鎬・京畿道驪州郡）、⑤利川商工会議所（京畿道利川郡）、⑥海剛高麗青磁研究所（柳光烈・同）、⑦東國窯（方澈柱・同）、⑧海平窯（尹允燮・同）、⑨宋山里古墳群・武寧王陵（忠清南道公州郡）、⑩国立公州博物館（同）、⑪国立扶餘博物館（忠清南道扶餘郡）、⑫落花巖（同）、⑬鷄龍山窯跡（忠清南道公州郡）である。また9月10日には大韓窯業総協会創立第41周年記念式典に出席した。以下やきものに関して訪問先で感じたことを簡単に報告する。

②について。高麗李朝の陶磁を二室に展示。高麗青磁は12世紀中葉がピーク。李朝の粉青沙器は15世紀が主である。玄関ロビーの天井画は和田三造の作品ということを知った。建物は旧朝鮮総督府跡。

③について。李朝時代の生活民俗をよく伝え、展示施設内では実際に生活が営まれている。2基の登り窯があり、高麗青磁の復元品と日用水甕がつくられている。蹴りロクロがある工房のそばに粘土貯蔵室があり、江陵粘土（甕器用）、麗州粘土、粘土、河東粘土、利川砂土などを表示して各室に貯蔵していた。民俗村を歩いていると鶏がのどかに鳴いていて昔の田園にタイムスリップした錯覚におそわれる。幼い頃に訪ずれた田舎を思い出し、できれば一日中ここにどまっていたかった。一番印象深かった訪問先である。

④について。趙慇鎬氏は作号石峰。石峰陶芸を経営。工房では若い女性が黙々と高麗青磁の復元品をつくっている。ほかに赤、黄、緑の釉下彩で虎や草花文を描いた皿や壺をつくる。上絵付装飾はおこなわれていない。登り窯を案内された時、有田では築窯レンガを「トンパイ」と呼ぶが韓国では何と呼ぶか趙氏に尋ねると「フピョットル」と呼ぶとのことであった。

⑤について。訪韓団と利川商工会議所および利川地区窯元代表が集まり、青木類次有田町長と岩尾新一有田町商工会議所会頭の講演があり、懇談会がおこなわれ親睦が深められた。韓国の窯元の人から「上絵付には

何の顔料を用いているのか」という質問がなされたが、それだけ上絵付に対する関心が深いのであろう。

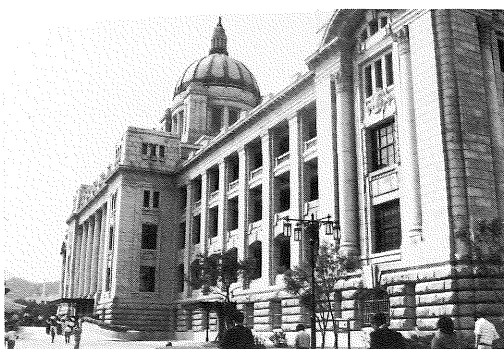
⑥について。海剛、柳根湲氏は1894年生。1960年、青磁陶工として人間文化財に選定された。高齢のため現在は長男柳光烈氏が研究所の代表。海剛氏は17歳の1910年から高麗青磁再現を志し、全国の古窯跡踏査と原料採集、分析実験につとめてきたという。

⑦について。赫山、方澈柱氏は現代高麗青磁第一人者という。1973年、人間文化財工芸展に出品した。陶土は全羅南道の高麗青磁古窯の近くからとりよせている。工場内には登り窯を廃して、大きな単室窯を築く。青磁のほかに李朝風の青花（染付）磁器をつくっている。

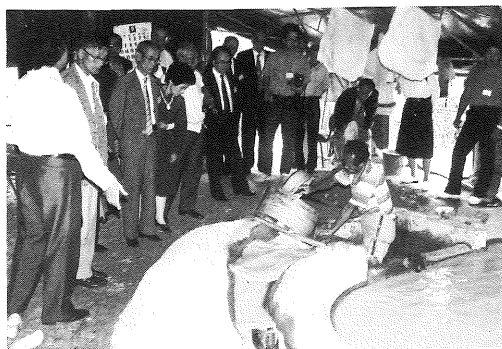
⑧について。爐山、尹允燮氏は1937年～83年の間、⑦の東國窯の工場長をつとめて後、独立。現在伝承陶芸協会理事。青磁、染付、高麗茶碗をつくっている。青磁に鉄絵と釉裏紅で様々な文様を描いている。青磁にヌードモデルを彫った作品は意欲的な試みといえよう。

⑬について。国立工業試験院化学試験部窯業科長李九鍾氏、大韓窯業総協会専務理事徐龍雄氏の案内で鷄龍山古窯跡視察。当地は昭和2年に旧朝鮮総督府によって調査され、報告書がだされている。刷毛目、三島手、絵刷毛目などの陶片にまじって、白磁の皿、碗の陶片が散在する。白磁の皿、碗の内面中央（見込み）と高台の畳付には珪酸質の砂粒が付着している。これは何枚も積み重ねて焼成したことによる。鷄龍山の作品といえば中央博物館や公州博物館にある白化粧地に鉄絵を施した絵刷毛目の徳利や壺しか見なかったのが、白磁の陶片群は大変に興味深かった。中島浩氣氏は『肥前陶磁史考』で「李三平は（中略）彼が郷里忠清南道鷄龍山の金江島を姓となして金ヶ江^{かないがえ}と改め、参平を三兵衛と通称することとなった」と述べ、また『陶磁史考断片』で「彼の郷里は忠清南道公州郡の金江（製陶地鷄龍山から二里計り東にて、いま儒城といふ温泉地の由）といふので、金ヶ江を姓となし、李参平を三兵衛と称することと成った」と述べている。

「李参平のルーツを探してほしい」という有田町長の要望に対して、韓日窯業親善協議会（金基衡会長）は「鷄龍山ではないか」と考えている旨を述べられた。その意味で私達を鷄龍山へ案内して下さったのであろう。私は馬渡八太郎氏が『李氏は日本磁器の元祖』（『肥前史談』昭和12年5・6月号・肥前史談会発行）に李参平は慶尚南道金海の人であると説く論文があることを金基衡氏に紹介しそのコピーを送ったことであった。



② 国立中央博物館



⑥ 海剛高麗青磁研究所(水簸による土づくり)



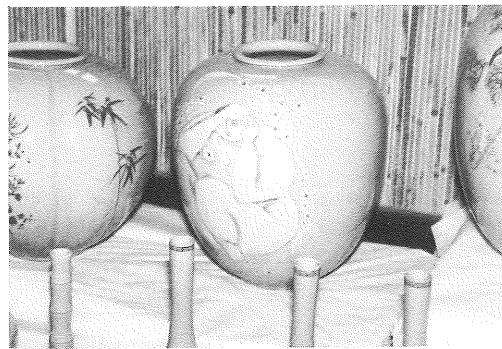
③ 民俗村の登り窯



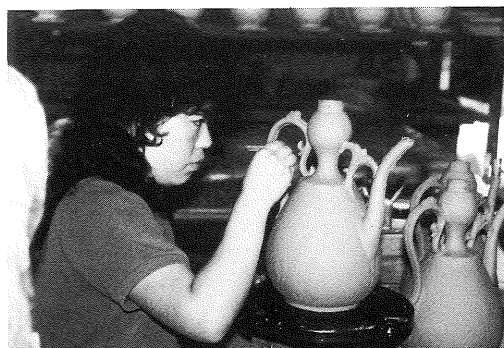
⑦ 東國窯・方澈柱氏



③ 民俗村の工房



⑧ 海平窯の尹允燮氏の作品



④ 石峯陶芸工房



⑬ 鶏龍山窯跡

〈速報〉

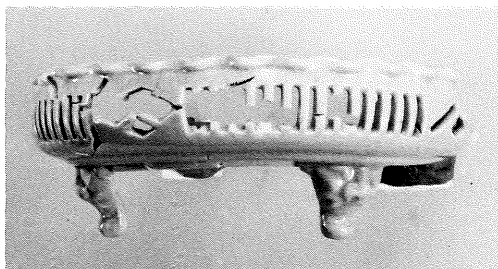
有田町下白川窯跡の調査

当館では、国庫補助事業「肥前地区古窯跡詳細分布調査」の昭和62年度調査として、下白川窯跡の発掘調査を7月13日から7月23日にかけて実施した。下白川窯跡は佐賀県有田町白川にあり、国史跡天狗谷窯跡の南200mに位置する。

発掘調査は4つのトレンチを設定して行ったが、その結果、最後に操業した窯の焼成室1室を検出した。すぐ上の焼成室の奥壁は現地表面に残っていたので、焼成室規模が判明した。焼成室の幅は約7m、奥行4.9mであり、奥壁の高さ（砂床から温座の巢〈通焰孔〉底面まで）は約89cm、通焰孔の数は27～28個、1つの通焰孔は幅6～9cmである。この窯床の下から、この窯以前の窯の窯壁片、窯道具、製品が多数出土した。堆積の厚さは1.4mであるが、この窯を築く際に、一度に埋立て整地した可能性が強い。この床下出土品をみると、17世紀前半のものと18世紀前半～中葉ごろの染錦手の輸出用製品などであり、この最後の窯の築窯は18世紀後半以降であることが判明した。この窯は、安政6年（1859）の絵図に21室の登窯として描かれており、明治まで操業した。

物原の調査では、地山上2.2mの厚さで堆積した物原層を確認した。物原の下層部は17世紀後半の窯の物原層が堆積し、その上には17世紀後半のものに加えて17世紀から19世紀までのものがみられ、窯場の操業期間の長さを物語っている。このように場所によって時期の異なる製品が捨てられていることは、17世紀前半、17世紀後半、18世紀前半～中葉、18世紀後半～明治と、窯の位置を変えながら「白川山」は存続したと推測される。製品内容は各時期で異なるが、主として17世紀後半の堆積層を調査したため、17世紀後半の出土品が多い。この時期のものは染付を主とし、青磁、白磁も多く、ルリ釉・鉄釉が少量あり、色絵碗の小片が1点出土。青磁は透彫を施した三足付中・大皿（図1）の優品が多い。輸出用製品としては芙蓉手皿、蓋物などの他、オランダの薬用壺を写した壺（図2）が出土しているのが注目される。

下白川窯は、1630年から40年代に開窯し、承応2年



1. 青磁透彫四つ目結文三足付皿

推定口径22.4cm 高さ8.5cm 底径15.0cm



2. 染付幾何文壺(オランダ陶器写し)

口径11.1cm 高さ11.6cm 底径7.8cm

（1653）『萬御小物成方算用帳』には上白川山（天狗谷窯）、中白川山と共に「下白川山」として記載されている。1670年代になると、天狗谷窯などは廃窯となり、白川地区の窯場は統合され、「白川山」として輸出用製品などを焼造した。18世紀前半から中葉には、染錦手の輸出用製品を焼いた窯の一つであり、18世紀後半ごろに最後の窯が築かれたと推測される。『皿山代官旧記』は1814年に「白川登」が22室の規模の登窯と記す。今回の調査によって、有田内山の中心的な窯場の一つである白川山の変遷の大筋を明らかにする資料を得ることができた。

（大橋康二）

利 用 案 内

開 館	午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館
観覧料	一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／中・小学生50円(30円)／()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
交 通	佐世保線有田駅下車徒歩15分